

南紀熊野ジオパーク構想地域 現地審査報告書（公開版）

【日程】2014（平成26年）7月4日（金）～6日（日）

【審査員】

大野希一（日本ジオパーク委員会）
中川和之（日本ジオパーク委員会）
加賀谷にれ（日本ジオパーク委員会現地審査員）

【現地視察の主な参加者】（職名）

仁坂吉伸（南紀熊野ジオパーク推進協議会会長、県知事）
西下博通（教育委員会教育長）ら和歌山県職員9人
濱口太史（同県議会議員）
関康之（同協議会副会長・新宮商工会議所会頭）
田岡実千年（新宮市長）ら新宮市職員、観光協会、商工会関係者ら10人
井澗誠（同協議会監事・白浜町長）
沼田久博（同協議会副会長・白浜観光協会会長）ら白浜町、同商工会関係者ら7人
小出隆道（上富田町長）ら上富田町関係者3人
岩田勉（同協議会副会長・すさみ町長）らすさみ町関係者3人
寺本眞一（同協議会副会長・那智勝浦町長）ら那智勝浦町、観光協会、
南紀くろしお商工会関係者ら11人
宇佐川彰男（太地町教育長）ら太地町関係者2人
武田丈夫（古座川町長）ら古座川町、商工会関係者6人
奥田貢（北山村長）ら北山村職員2人
田嶋勝正（串本町長）ら串本町、観光協会関係者ら8人。
鈴木博之（同協議会顧問兼学術専門委員長）ら専門委員3人
加藤雅寛（同協議会アドバイザー・環境省熊野自然保護官事務所自然保護官）。
神保圭志ジオパークガイドの会会長ら同会ガイド38人
山縣弘明（熊野円座会長・那智勝浦町会議員）ら熊野円座会員2人
角本聖洋（宇久井海の森の自然塾）
富士本佐知代（宇久井ビジターセンター）
白樫卓司ら新宮市篠尾地区住民6人。
加藤康高（記の松島観光株式会社専務）
辻照幸（南紀白浜クルージング「五漁丸」船頭）ら観光事業者4人。
東川智昭（同協議会事務局長）ら事務局員5人

【見学地点・行程】

7月4日：概況説明、南エリアヒアリング

7月5日：古座川の一枚岩(古座川町)、橋杭岩(串本町)、北エリアヒアリング、熊野川舟下り、東エリアヒアリング、環境省宇久井ビジターセンター(那智勝浦町)

7月6日：那智の滝(那智勝浦町)、高池の虫喰岩(古座川町)、さらし首層(串本町)、フェニックス褶曲(すさみ町)、西エリアヒアリング、ジオクルージング(千畳敷～三段壁～円月島)、南紀白浜空港ビルで講評

現地審査のまとめ

南紀熊野地域は、中生代白亜紀から続くプレートの沈み込みに伴って生じた付加体群と、それを貫く新生代第三紀の酸性貫入岩体がつくり出した那智の滝などの景観、そしてそれらが育んできた人々の独特の地域文化が学べ、楽しめる地域である。当該地域には、古座川の一枚岩、橋杭岩等の天然記念物や熊野川などの渓谷に代表される自然景観が豊富であることに加え、その景観が誘発した熊野信仰に代表される特徴的な地域文化が古くから存在し、現在なお継承されている。当該地域の一部は国立公園や県立自然公園に指定されているほか、世界遺産やラムサール条約湿地に指定されているエリアも存在し、地域住民の既存の取り組みと連携しながら、様々な方法で地域遺産が保全されている。南紀熊野ジオパーク構想を推進する協議会は、和歌山県を中心に9つの市町村が互いに連携を図りながら事業を推進している。協議会事務局内には地質を専門とする職員が配属されているほか、ガイドの育成も進みつつある。さらに、住民の中に地域資源を活用して地域を盛り上げようとする多数のキーパーソンが、ジオパークの担い手として積極的に活動を始めており、その活動を行政がサポートするといった、ボトムアップ型の地域振興が実現しつつある。また、繰り返されてきた南海トラフでの地震・津波災害や、平成23年台風12号による土砂災害の経験が、地域の防災教育の素材として活用され始めている。今後は、地域の担い手と共に、ジオパークとしてのエリアの明示や、ジオサイトの価値を分かりやすく説明する解説板・ガイドブック等の冊子類の整備を進めるとともに、複数の行政区のさらなる情報共有を通じて、一体感のある持続可能な運営体制を整備することが必要である。

1) ジオサイトと保全

ジオサイトの多くは吉野熊野国立公園や古座川県立自然公園および熊野枯木灘海岸県立自然公園の指定地域内に存在しているほか、世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されている熊野古道、ラムサール条約に登録された世界最北の造礁サンゴ群集など、世界的価値を有するジオサイトが法律や制度等によって保全されている。特に、この地域のジオサイトは信仰対象となってきた場所が少なくなく、学術的価値の確認以前から、地域遺産が地域住民によって適切な方法で守られてきた歴史があり、ジオパークらしいボトムアップ的保全に繋がっている。

2) 教育・研究活動

当該地域の地域地質に関しては、和歌山大学等、地元研究者による研究成果が蓄積されているほか、JAMSTECに代表される研究機関により、地球科学に関する最新の研究成果も精力的に産み出されている。また平成23年の豪雨災害を契機に、土砂災害の研究・啓発拠点施設の建設も計画されている。地元の小中学校では、これらの研究機関と連携した地球科学教育や、将来の津波や土砂災害に対峙し、地域の防災教育を推進するための一つのツールとしてジオパークを活用し始めている。この取り組みは、東日本大震災以降さらに重視され、地域の自然と人々が共存していくことの大切さが教育現場で語られ始めている。今後は、ガイドが最新の研究成果をわかりやすく地域住民や訪問客らに伝えられるよう、学術情報を共有するしくみが求められる。

3) 管理組織・運営体制

現会長の和歌山県知事のトップダウンで始まった本地域のジオパーク構想だが、現在では地域住民の活動を行政がサポートするという、ボトムアップ型の地域振興の流れができつつあり、会長自身が「自らの役割は終えた」と語るほどの状況になっている。エリアが広域であるにもかかわらず、月に1回程度の担当者会議が開催され、一定の情報共有もなされている。その結果、9つの市町村それぞれが何らかの形でジオパークを活用しようという気運が生まれ、さらにこれらの活動を、環境省熊野自然保護官事務所など政府機関がアドバイザーとして実質的に支えている。その一方で、訪問者の動線にも重なる4つのエリア分けには一定の合理性はあるが、エリア間で取り組み体制の温度差が出ないように工夫が必要である。

4) 地域の持続的発展とジオツーリズム

有償ガイドを前提とした59名の認定ジオガイドや、「地域を最も有名な限界集落にする」という目的を掲げて私設の観光協会を立ち上げた若い人など、地域の魅力を発信する意欲にあふれた人材が豊富であり、その人たちに上手くジオパークの概念が伝わっている。また、カヤックやクルージングといった既存の観光サービスの中に、無理なくジオパークの取り組みが採り入れられている。特に、世界遺産の登録を機に整備が進んだ熊野古道の川下りの語り部らが、「世界文化遺産である熊野古道の宗教文化は、この地のジオが育んだ」という時空を超えたストーリーを語り、世界遺産の見学に来た顧客にジオパークの魅力を伝えるなど、質の高いガイドがなされている。既存の観光コンテンツが、新たにジオツアーの視点や手法を取り込み始めたことにより、来訪者が受けられる観光サービスは確実に豊かになっている。今後は、認定ガイドが活躍できるツアーの拡充や、めはりずし、地酒等、当該地域ならではの文化を反映した独自の特産品のジオパークブランド化などが期待される。今後、高速道路の南下など、現地へのアクセス道の変化なども見据えながら、ジオパークのエリアへの誘導をどう図っていくかの工夫も求められる。

5) 国際対応及びネットワーク活動

世界文化遺産の登録地が当該地域に含まれていることもあり、外国語版のパンフレット類の整備等、一定の国際対応は既に取り組みられている。特に、政府の観光特区による地域限定の「通訳案内士」資格を持つガイドが存在し、地域の魅力を世界に向けて発信できる体制もある。また、当該地域は同じ南海トラフを眼前にする室戸世界ジオパークなどとの連携をすでに進めているほか、JGN 他地域のジオサイトにある道の駅と連携させた「ジオサイト道の駅」のネットワーク事業の計画がある。さらに、国内には共通点があるジオストーリーを持つジオパークもあり、他地域との実質的な交流を深めて、日本ジオパークネットワークの活動への貢献が期待される。

6) 防災・安全

フィリピン海プレート沈み込みで繰り返されてきた地震や、日本有数の豪雨地帯故の洪水・土砂災害への対策もあり、当地域では一定の防災対策や防災教育が行われてきた。津波岩でもある橋杭岩や、土砂の崩れが目目の当たりにある熊野古道の川下りでは、ガイドの中で自然災害が語られるなど、ジオパークの活動と防災が結びつきつつある。今後は、ジオパークの活動を地域防災力の向上につなげると共に、防災教育のフィールドとしてのより一層の活用が期待される。

結論

当該地域は、まさに地球科学に関する最新の研究成果が地域住民に普及啓発され、ひいてはそれらが地域防災にも貢献しうるような、ジオパークとして高いポテンシャルを有する地域である。行政の働きかけをきっかけに一部の地域で起きたジオパークの活動が、今は地域全体に広がり、住民自らが自分たちの手でジオパークというしくみを活用し、津浪防災なども考えつつ、地域振興につなげていこうという気運がある。世界文化遺産に認定されて10年になる熊野古道の取り組みとも有機的な連携が図られている。現時点ではまだ課題も多いが、認定を機にこの取り組みを持続可能にするための行政、ガイド、学術関係者、地域住民間の、更なる情報共有と相互連携を進める仕組みの強化が進むことを期待し、現時点で当該地域が日本ジオパークを名乗るのに相応しいと考えて、認定する。